

論争

ウラン原発を廃止してトリウム原発を

長瀬 隆

(ながせ たかし・作家、ロシア文学者)

岩垂弘氏は近著『ジャーナリストの現場』(同時代社)のうち、3・11以降の三つの文章で、「フクシマ」報道を批判し、「朝日新聞」の一九七六年の連載企画「核燃料 探査から廃棄物処理まで」(科学部大熊由紀子記者)を取り上げている。その結論は「核燃料からエネルギーをとり出すことは、資源小国日本にとっては、避け得ない選択である」というものだった。これに「呪縛」されて、どの新聞にも以後「脱原発」を説く社説・主張は現われなかったのだと私は見る」と著者は言う。単行本になったとき、反原発運動関係者を意識して「あとがき」に「彼らが核燃料のことや放射線の人体への影響などについて正確な知識を持ち合わ

せていないことに驚いた。多くの人たちが、アメリカの反原発のパンフレットや、その孫引きを読んだ程度の知識で原発廃絶を主張していた」と書かれてあるという。これは反対運動に対する新聞の側からの攻撃だった。こうしてこの後、これによりあなたも露払いが済んだかのように、原発推進の広告が洪水のように掲載されることになった。そしてその結果が今日の「フクシマ」なのである。したがってこれに対する自己批判なしの報道と論評は許されない。

しかしながら反対運動もその全てが正しかった、ということではできない。それは今日でもそうなのであって、ただ単に「脱原発」を言うことは、何も言っていないに等しい。自然エネルギーだけでは、日本は、また世界の発展途上の国々はやってゆけないのである。廃止し、脱却されねばならないのは、プルトニウムを生成するウラン原発である。しかしそうではない原発があるならば、それを利用しない手はない。

敗戦時すでに化学者をめざす旧制高校理科生であり、身近に被爆者を見ていたこともあって、大学で原発研究に入りながら、ウランではない方法を模索した日本人がいる。米国のオークリッジ国立研究所が、トリウムを使用し、固体ではなく熔融塩という液体炉での発電を目指していることを知り、「一九五九年にこの成功を信じ、この炉をライフワークに選んだ」と記す。以後彼、古川和

男氏は一筋にこの道を歩んだ。

米トリウム熔融塩原発は少ない費用と短い期間で実験にまた運転に成功したにもかかわらず、実用面で挫折を強いられた。それは、軍が核弾頭用に大量のプルトニウムを必要としたからであって、冷戦の論理が優先したのである。また原子力潜水艦の発電装置が強く志向され、完成されたその原子炉が、陸上での「平和利用」に改良転用されることになり、やがてこれが日本に押し付けられたのである。古川氏の、一般向けでは、二〇〇一年初版の「フクシマ」後の増補改訂版『原発安全革命』(文春新書)に従い、トリウム熔融塩原発に転換すべきである。その時にのみ問題は全面的に解決されるであろう。

第7回9条フェスタ、今年も開催します

市民運動グループの自己紹介欄です。連絡先(住所・電話番号)を含め15字×40行で「こんなこと、やってます」係宛にお送りください。掲載の場合はご連絡します。

こんなこと、やってます



9条フェスタは、非暴力で平和を求める多様な団体、個人がつながり合うための開かれた集いとして二〇〇五年からはじめました。今年のテーマは、「子どもたちに手渡すのは、原発のない、戦争のない社会」。日時、企画は以下の通りです。是非、お出かけ下さい。

【日時】11月5日(土) 10時半〜17時半
【ところ】東京都・総評会館(千代田線・新御茶ノ水駅0分、JR中央線・御茶ノ水駅5分)【チケット】前売り500円、当日700円、小・中学生100円
【企画紹介(一部)】
▼映画「GAMA 月桃の花」
「チャイナ・シンドローム」(重要予約)「亡命」I.V.A.W 明日へ
のあゆみ、▼宇梶静江の古布絵

▼写真展「広河隆一写真展「チエルノブイリ25年・フクシマ元年」」
▼講演「原発災害をもたらしたものは何か」丸山重威、「いま憲法の視点を!」樋口陽一、石川元平、ほか
▼お話し「えん罪福岡事件、撫順の奇蹟を受け継ぐ会、シベリア抑留・舞鶴引き揚げの記憶」オーブニング・熊谷たみ子「カムイレン カイネ」「大地よ」▼エンデ

リング・制服向上委員会「ダッ! ダッ! 脱・原発の歌」「原発さえなければ」▼ブラス・チエルノブイリ子ども基金、もんじゅ・西村裁判へようこそ、たんぼぼ舎、S TOP! 浜岡原発、リニア市民ネット、法学館憲法研究所など多数
【連絡先】(9条フェスタ事務局)
TEL 03-3442-2381
TEL 03-3442-2333